

秋田県の生涯学習政策の源流

—小畑勇二郎の足跡から読み解く—

田 口 ア キ

田口 アキ

要旨

秋田県では、1955年から1979年まで秋田県知事を6期24年務めた小畑勇二郎（1906-1982）の主唱により、我が国の地方自治体としては、先進的に生涯教育の推進に取り組み始めた。

そこで本研究では、第1に、小畑がなぜ、全国の中でも先駆的に生涯教育を推進しようと思いたち、自ら先頭に立って行動したのか、第2に、具体的にどのように生涯教育を推進していったのかという経緯や思想を明らかにし、「秋田県の生涯学習の源流」を探った。その手法として、小畑の生涯教育に関して論じた著書や講演集などの文献調査と、小畑にゆかりのある関係者らにインタビュー調査を行った。

本論文は序章に続き、全2部6章と終章により構成した。

第1部では、小畑勇二郎とはどのような人物だったのか、小畑がなぜ全国的にも早い段階で生涯教育を推進しようと思いついたのかという問題意識を持ち、「自己形成の過程」、「キャリア形成過程」、「国際経験」、「生涯教育に関する思想」の4つの観点から、小畑の生い立ちや生き方、教育に対する理念についてまとめた。

第1章では、小畑の誕生から秋田県庁の職員になる前までのあゆみをたどりながら、生涯教育の推進へとつながるきっかけや出会い、その背景を探った。第2章では、小畑が秋田県庁職員を経て、県知事を6期務めて退任するまでの期間に、小畑がどんな取り組みを見せたのかということに着目し、生涯教育の推進の実情について検討した。第3章では、秋田県の生涯教育の一つの分野として、国際的な事業を取り入れていたことや、諸外国と秋田県の生涯教育事業への影響関係について掘り下げた。第4章では、小畑の生涯教育に関する思想に焦点を当て、小畑が生涯教育を推進しようと思いついた事情や背景について検討した。

第2部では、小畑の生涯教育に対する思想が秋田県の生涯教育政策及び事業にどのように表れているのか、「1970年代の秋田県の生涯教育政策」、「秋田県の生涯教育施設」、「秋田県の生涯教育事業」の3つの観点から、小畑が知事を務めた1970年代の秋田県の生涯教育のあゆみや、小畑の生涯教育に対する思想に基づいた政策、事業、施設の事例や背景を詳しく調べた。

第5章では、小畑が県知事を務めた1970年代の秋田県の生涯教育政策の形成と実施の経緯に着目し、秋田県が具体的にどのように生涯教育を推進していったのか探った。第6章では、小畑の生涯教育に対する思想と生涯教育に関する政策が、秋田県の生涯教育施設や事業全般に対してどのように影響を与えているのか、明らかにした。

終章では、小畑が生涯教育政策を推進する上で、後世に受け継いでほしいと思ったことは何だったのか、各章で明らかにしてきた事実をもとに、現代の秋田県の生涯学習の状況を検討しつつ、日本全体の生涯学習のあり方について考察し、本論文のまとめとした。

秋田県が生涯教育を推進してちょうど半世紀が経った現在、小畑が中心となって推進してきた「生きがいを感じる学習」、そして、「人と人とのつながり」を大切にし、「地元の人材をうまく活用すること」に力を入れてきた秋田県の生涯教育の原点を、これからの日本の生涯学習のあり方を見つめ直す上で、今こそ再認識すべきであると考えます。

なお、本稿では、修士論文の骨子を取り上げた。小畑の生涯教育の推進と、小畑の生涯教育に関わる足跡から、生涯教育を推し進めた背景と影響関係を探った。また、小畑が県知事を務めていた1970年代に秋田県が具体的にどのように生涯教育を推進したのか、政策や事業の観点から、秋田県の生涯教育の特色と今後の日本全体の生涯学習の方向性について考察した。

田口 アキ

1. はじめに

本研究の目的は、1970年代に日本の中でも先進的に生涯教育を推進した秋田県に着目し、そのキーパーソンである当時の秋田県知事であった小畑勇二郎の足跡とともに秋田県の生涯教育政策形成の過程を、以下の問いから明らかにすることにある。秋田県知事を務めた小畑勇二郎がなぜ、全国の中でも先進的な取り組みとして秋田県で生涯教育を推進しようと思いついたのか。秋田県では具体的にどのように生涯教育を推進していったのか。小畑が当時、秋田県民に伝えたかったことは何か。そして後世に受け継いでほしいと思ったことは何だったのか。秋田県で推進された生涯教育に関わる事業の詳細とともに、小畑の生い立ちや足跡を顧みながら、秋田県における「生涯教育の源流」を探る。そのための研究方法として、小畑が生涯教育に関して論じた著書や講演集などの文献調査と、小畑にゆかりのある関係者らへのインタビュー調査を行った。

秋田県が1970年代に生涯教育を推進したことは、よく知られている。例えば、秋田県の生涯教育に関しては以下のような先行研究がある。

秋田県教育委員会（1986）¹は、1970年4月に小畑の主唱により、生涯教育研究のためのプロジェクトチームが設置されたことや、秋田県の生涯教育推進の主な流れを記録している。だが、秋田県の生涯教育の歴史的経緯については、詳しく触れておらず、小畑の生涯教育に対する思想についてもほとんど述べていない。

1980年に設立された小畑勇二郎顕彰会²は、小畑の関係者による小畑の生涯と業績に関する論稿や小畑自身の日記、手紙並びに講演集を収録した書籍を出版している（小畑勇二郎顕彰会1985, 2001）が、分析までには至っていない。

岡本包治・山本恒夫（1985）³は各都道府県の生涯教育の事業や生涯教育の推進状況を分析し、秋田県の生涯教育の施策は小畑のリーダーシッ

プによるところが大きいことや秋田県の生涯教育の事業を紹介している。

また井上講四(2007)⁴は、日本における生涯教育(学習)政策・研究を概観しながら、1965年に波多野完治がユネスコ会議に参加したことで、日本の生涯教育政策の形成が始まったが、現場実践的には秋田県や兵庫県が首長のリーダーシップのもとに1970年前後から既に取り組んでいたと述べている。だが、小畑の名前や業績については触れておらず、1970年前後に秋田県が生涯教育を推進したという事実のみを紹介しているだけである。

秋田県の生涯教育推進の展開過程における小畑の功績について取り上げている研究論文としては、山田正行(2003)⁵ならびに古内一樹・原義彦(2015)⁶があるが、いずれも小畑の思想と関係づけた具体的な政策や事業の分析までは行っていない。

そこで本稿では、第1に、秋田県で生涯教育を推進する上で中心となった小畑勇二郎元秋田県知事のあゆみと、生涯教育推進のきっかけとなった背景や影響関係について「自己形成の過程」、「キャリア形成過程」、「国際経験」の3つの観点から探っていく。第2に、小畑が秋田県知事を務めていた1970年代の秋田県の生涯教育の歴史を明らかにするために、秋田県の生涯教育政策について見ていく。第3に、特色ある秋田県の生涯教育の事業について明らかにする。そして、第1から第3までの研究で浮かび上がった秋田県の生涯教育の特色をまとめ、現代の秋田県の生涯学習の実情について触れながら、今後の日本の生涯学習のあるべき姿を考察した。

2. 小畑勇二郎のあゆみ

小畑勇二郎は、1906年9月19日⁷に秋田県北部の早口村(現秋田県大館市)という青森県境に近い地域で、父の勇吉と母のシカの間に次男

田口 アキ

として生まれた⁸。小畑は秋田中学(現秋田高校)卒業後、社会経験を積んでから小学校の代用教員を務めたが、この時が小畑にとって初めて教育と関わった出来事といえる。その後、1939年に秋田県庁の職員になり、県民生部長に着任した時には県立児童会館を設置し、ソ連のピオニール宮殿、中国の少年宮を参考にした構想で運営に乗り出した⁹。小畑は、秋田県知事に就任する以前から子どもの教育のあり方について幅広く考え、行動を起こしていたことがわかる。知事になる前から教育への関心が人一倍高かったのは間違いないだろう。また、秋田県の児童会館は、ソ連や中国の同様の施設を参考に運営していたという事実から、小畑は海外に広く目を向けていたことがわかる。

小畑は、1955年から6期24年間にわたって秋田県知事を務めた。第1期(1955年～1959年)では、赤字財政の再建や、全国第2位の大きな湖沼であった八郎潟の干拓など大型公共事業に取り組み始めた。第2期(1959年～1963年)では、当初10年計画だった財政再建を8年間で終わらせ、財政赤字で意気消沈していた県民を元気づけようと秋田国体(国民体育大会)を開催した。第3期(1963年～1967年)では、「農業近代化ゼミナール」や「家庭の日」、「青年議会」などの社会教育や家庭教育の振興に取り組んだ。第4期(1967年～1971年)では、全国でも先端的な「脳血管研究センター」の設立や、80歳以上の高齢者を対象にした医療費の無料化など、医療福祉の充実に力を入れた。第4期の1970年には、秋田県庁内に生涯教育推進のためのプロジェクトチームを設置した。これが秋田県の生涯教育推進の始まりであったといえよう。小畑は、生きがいを感じることができ生涯教育を重んじていた¹⁰。そして、第5期(1971年～1975年)では、「若い力を県政に」というスローガンを掲げ、本格的に生涯教育を推進した。国際交流事業として、第5期には「訪ソ青年の船」、第6期には「日中友好秋田県農業青年の翼」に取り組んだ。

小畑は、やると決めたらやり遂げる勢いと責任感がとても強かったこ

とが窺える。また、秋田県知事になる前から代用教員や県の民生部長を務め、教育に深く関わってきたことから、生涯教育に対する理解が大きかったのだろう。知事第3期には、「農業近代化ゼミナール」や「家庭の日」、「青年議会」など家庭教育や社会教育に力を入れていたことから、第4期から生涯教育を推進する上での基盤となっていたと考えられる。また、第5期に「訪ソ青年の船」、第6期に「日中友好秋田県農業青年の翼」に取り組んでいたことから、「国際的な視点」を持っていたといえるだろう。

このように、小畑個人の「多様な経験」や「多くの人との出会い」、「国際的な視点」を持っていたことによって、行き着いたものが「生涯教育」だったのではないだろうか。

3. 秋田県の生涯教育の誕生

(1) 秋田県における生涯教育研究プロジェクト班の設置

秋田県は、1970年に県庁内に11課16名による生涯教育を研究するプロジェクトチームをつくり、生涯教育に関する考え方や進め方について研究を行った¹¹。生涯教育推進のためのプロジェクトチームは様々な課が連携しあって生涯教育について研究をしていた(表1)。

秋田県の生涯教育は、当初より、教育をはじめ、様々な行政部門が組み合わせあって連携しながら推進しようとしたことがわかる。また、教育の面からだけでなく、農産業や職業など様々な課が専門性を生かして教育を県民に提供していこうとしていた。

田口 アキ

表1 1970年の県庁内のプロジェクトチーム編成

| 区分 | 課 所 名 | 人 数 |
|------------------|-------------|-----|
| 教 育 庁 | 社 会 教 育 課 | 3 |
| | 学 務 課 | 1 |
| | 指 導 課 | 3 |
| | 保 健 体 育 課 | 1 |
| | 教 育 セ ン タ ー | 2 |
| | 青 年 の 家 | 1 |
| 知 事 部 局 | 福 祉 課 | 1 |
| | 婦 人 児 童 課 | 1 |
| | 農 産 普 及 課 | 1 |
| | 労 政 課 | 1 |
| | 職 業 訓 練 課 | 1 |
| 計 | 11 | 16 |

(出典) 秋田県生涯教育推進本部（編）1985『秋田の生涯教育 一回顧とこれからの期待―』, 秋田県生涯教育推進本部, p.14 をもとに筆者作成

(2) 秋田県生涯教育推進本部の設置

秋田県では1972年4月に秋田県生涯教育推進本部を設置し、小畑が本部長を務め、副知事と教育長が副本部長を務めた¹²。秋田県生涯教育推進本部には、秋田県生涯教育推進本部長の諮問機関として29名の県民代表によって秋田県生涯教育推進協議会が設置され、その中に8名による常任委員会が設けられた¹³。また、秋田県生涯教育推進本部の顧問として、藤原英夫（甲南女子大学教授）、森隆夫（お茶の水女子大学教授）、塚本哲人（東北大学教授）、村井実（東京大学教授）、村松喬（東海大学教授）、大野連太郎（国立教育研究所指導普及部企画室長）、伊藤忠二（元秋田県教育長）の7名を委嘱した¹⁴。これは、客観的な立場から指導助言をもらうためだった¹⁵。

小畑が秋田県生涯教育推進本部の本部長を務めていたことから、自ら中心となって秋田県の生涯教育を推進しようとしていたことがわかる。また、諮問機関として県民の代表を選んで秋田県の生涯教育を推進していったことから、県民の声を反映することができるような体制をつくっていたといえる。さらに、顧問には大学教授が多く所属していたことから、様々な学術的、専門的な視点から助言や指導を受け、秋田県の生涯教育を推進しようとしていたことが窺える。

4. 秋田県の政策と生涯教育事業

(1) 『第3次秋田県総合開発計画』の策定

『第3次秋田県総合開発計画』は、1971年から実施された。秋田県のすぐれた開発条件をあらゆる面で追求し、県政の発展の基礎をつくるため、広域生活圏の形成を促進して都市と農村との安定した生活環境をつくるとともに、農業の発展と工業の開発を進め、地域経済の拡大と労働力の円滑な流動をはかり、農工一体の豊かな郷土をつくることを基本目標とした¹⁶。この基本目標を達成させるために、「1 健康と生活を高める福祉社会 2 生産性の向上をめざす産業の開発 3 生涯教育の推進と人間能力の開発」¹⁷の3つの課題を掲げた。秋田県は初めて「生涯教育」を行政の重要課題として掲げ、実践した¹⁸。

『第3次秋田県総合開発計画』の3つ目の柱では、「生涯教育の推進と人間能力の開発」を掲げ、時代状況の急速な変化により、人々の知識や技術は新しいものが絶えず求められ、平均寿命が延び、社会に適応するために学習が必要になってくるとしている¹⁹。また、社会生活が高度化、複雑化することによって、人間性の喪失と人間疎外の傾向が当時高まりつつあった²⁰。

このような社会において、生きがいを感じ、充実した生活を送るためには、実践的な社会性と創造的な課題解決の能力を身につけた文化的で健康なたくましい人間であることが望まれていた²¹。社会の発展に対応するため、人間性の回復に対する要求の増大は、学校教育だけでなく、家庭、学校、社会における教育機能の体系化と最適化を必要とし、「求められる教育」、「開かれた教育」、「満たされる教育」を生涯にわたって保障し、自己啓発する教育的風土を築くことが教育における最も重要な課題であるとした²²。また、知性に富み、健康で人間性豊かな県民を育成するためにすべての県民に対して生涯にわたって最適な教育の機会と場を提供することを保障し、生きがいを目指して、いつでもどこでも学び

田口 アキ

合う姿勢を身につけることが必要であった²³。

『第3次秋田県総合開発計画』では、「生きがい」という言葉が何度か使われていることから、秋田県の生涯教育は「生きがい」を重んじた生涯教育を推進しているといえよう。

(2) 『第4次秋田県総合開発計画』の策定

『第4次秋田県総合開発計画』は、1976年から実施された。『第4次秋田県総合開発計画』では、多様化しつつある県民のすべての欲求に応えるために所得を増やし、物質的欲求だけでなく、精神的な充実感を与えること、「真の豊かさ」を求めて県政を進めることが必要であると述べられていた²⁴。また、「真の豊かさ」を「環境」、「くらし」、「心」の3つの豊かさに類型化し、調和をはかりながら「真の豊かさ」を段階的に追求していくことを『第4次秋田県総合開発計画』の基本目標とした²⁵。

この3つの豊かさの中の1つである「心の豊かさ」においては、地域に住んでいる人々が自らの力で地域振興がはかれるように県民が郷土に誇りと愛情を持ち、助け合って暮らしていく社会的連帯感を持ったうのおいのある人間形成をはかるために、県民が生涯にわたって学習を積み重ねる、すなわち生涯学習の機会の充実と気運の醸成に努めなければならないとした²⁶。

また、「環境」、「くらし」、「心」の3つの豊かさを求めるために、『第4次秋田県総合開発計画』の主要課題として、「1 やすらぎのある安全で快適な社会環境の創造 —豊かな環境— 2 健康が守られくらしの向上が図られる地域社会の建設 —豊かなくらし— 3 豊かな未来社会を築く主体性のある人間形成 —豊かな心—」²⁷を掲げている。この3つ目の「豊かな未来社会を築く主体性のある人間形成」を実現するためには、郷土に誇りと愛情をもち、助け合える地域社会をつくる一員としての社会的連帯感と自分の力で地域社会をつくっていくという意識を備えた人間を形成していくことが基本であった²⁸。これは、環境、くらしの2つ

の豊かさを備えた地域社会をつくっていくためでもあるとした²⁹。このために、県民が生涯にわたって自己学習を続けることが必要であり、学び続けることができるような環境を整えること、すなわち生涯教育の拡充に努めることが大切であった³⁰。

(3) 特色のある生涯教育事業

①生涯教育奨励員と生涯教育奨励室の設置

1974年、秋田県では市町村に「生涯教育奨励員」の制度を設置した³¹。「生涯教育奨励員」は、「フランスでやっておりますアニマトゥールの秋田県版ともいべきもの」³²と小畑は述べている。

秋田県の生涯教育が広く普及浸透するためには、県民の身近なところで学習活動を奨励、援助するための民間の指導者が必要であるため「生涯教育奨励員」の制度を設置した³³。

生涯教育を推進するためには、教育的機関、施設の職員が指導者として中心的な役割を担当することになるが、生涯教育は幅広いため民間有志の指導者から協力してもらい、総合的に組織づけて円滑な運営をはかることが重要だとした³⁴。このため、県民の学習活動が充実するように専門指導者と生涯教育奨励者によって組織し、連携を取りながら推進することが望ましいと考えられていた³⁵。

専門指導者とは、行政における指導者と有志の指導者によって構成されている³⁶。行政組織における指導者とは、幼児教育や学校教育の教員、社会教育主事、スポーツ指導員など、専門的な知識や技術を持っている指導者である³⁷。また、有志の指導者とは、教養、技術、趣味などの分野で専門的な技術や技能を持ち、県民の学習の要望に応じて指導できる人のことをいう³⁸。

「生涯教育奨励員」とは、自分の特技を生かして指導したり学習相談を行ったりして、学習希望者のグループ化をはかり、秋田県民の主体的な学習活動を充実させる人々のことをいう³⁹。「生涯教育奨励員」の目的は、

田口 アキ

地域における生涯教育を推進する上で中心的な活動者として市町村住民の学習活動を奨励援助し、地域が主体となって生涯教育推進、充実に努めることである⁴⁰。「生涯教育奨励員」の役割は、住民の意欲を高めること、特技を生かして学習活動をサポートすること、学習希望者の組織化をサポートすること、学習の相談に乗ること、学習の情報や資料を提供することが挙げられる⁴¹。

このほかにも、気軽に生涯学習の相談を受けられるように、「生涯教育奨励室」(通称「ブルーの窓口」)を設置した⁴²。「生涯教育奨励室」の設置の目的は、県民の学習を推進するための場所として生涯学習に関するあらゆる相談に応じ、奨励、助言を行うとともに生涯学習の推進に関する情報を集めることや情報を提供することを通して生涯学習を拡充することである⁴³。

「生涯教育奨励員」は、フランスの「アニマトゥール」に影響を受けていることから、秋田県は海外の教育事情にも目を向けていたといえるだろう。「生涯教育奨励員」は、県民が主体的に生涯にわたって学習できるように、奨励、援助することや、自分の特技を生かして学習者をサポートすることが活動内容であるということがわかる。

生涯学習の相談や指導を受けられるような体制ができたことで、県民一人一人に合った生涯教育を提供することができるようになったのではないだろうか。生涯学習の講座を受けてみたいものの、生涯学習についてあまりよくわからない人や自分に合った生涯学習を提供してもらいたい人などにとっては、大変心強い環境だと考える。しかし、「生涯教育奨励員」が県民の学習をサポートできる分野が偏ってしまい、学習相談に応じられないという問題が出てきた場合、どのように対応していたのか、疑問である。特技や専門性の分野が偏った場合の対処方法も考えるべきではなかっただろうか。

また、「生涯教育奨励員」は、市町村が推進し、秋田県生涯教育推進本部が研修を行い市町村が中心となって修了者に委託される⁴⁴。この点に

ついて考えると、県民が主体的に「生涯教育奨励員」を務めるということができないことが課題の一つではなかったかと考える。

現在も秋田県生涯学習センターには、「ブルーの窓口」が設置されている。小畑の取り組んだ事業の一つである「ブルーの窓口」が設置され続けているということは、それだけ秋田県の生涯学習に必要な事業であるということの表れだろう。

②訪ソ青年の船

1972年から「訪ソ青年の船」が始まり、小畑が団長を務め、毎年約260人とともに2週間かけてナホトカ、ハバロフスクを経た後、モスクワ班はモスクワ、レニングラード、キエフ、シベリア班はイルクーツク、ブラーツク、ノボシビルスクなどの各都市を回った⁴⁵。「訪ソ青年の船」は、1979年まで8年間続いたが、小畑は5回目まで団長を務めた⁴⁶。6回目以降は、後に秋田県知事を務めた佐々木喜久治が団長を務めた⁴⁷。

この事業の目的は、ソ連の青年との親睦を深め、研修を行って、国際協力の精神を涵養すること⁴⁸や体制の異なる世界を見て、青年たちの目を開かせて自由の尊さを知ってもらいたい⁴⁹ということだった。

小畑は「訪ソ青年の船」の目的について座談会で次のように述べている。「これから秋田県を担う青年諸君に海外を見てもらい、そして海外から自分の故郷を見直し、その若い力を郷土建設に役立ててもらおうという意味で立県百年記念事業の一つとして始めた海外研修で、今年で二回目です。」⁵⁰

小畑が述べていたとおり、「訪ソ青年の船」は、「若い力を県政に」というスローガンのもと、秋田の立県100年記念事業の一つとして企画した事業だった⁵¹。

第1回「訪ソ青年の船」では、ナホトカでナホトカコムソモール第一書記主催の交歓会が開かれ、日本人墓地参拝、映画鑑賞(国際船員会館)、保育園の見学を行った⁵²。例えばブラーツクでは、セントラル図書館の

田口 アキ

視察、青年スポーツ大会、青年文化交流などを行い、モスクワでは、日ソ友好会館の訪問、モスクワ大学やクレムリン宮殿、赤の広場などを回り、ピオネール宮殿の見学などをした⁵³。このように訪ソ青年の船では、様々なところを歩き、交流を深めていた。

第2回「訪ソ青年の船」に参加した青年は、帰国に向かう船の中で行われた座談会で不自由に感じたことや交流について次のように述べている。「やはり言葉ですね。ひとつふたつは手帳なんか見て質問したけれども、返ってくる答えが全然わからない。」⁵⁴

第1回「訪ソ青年の船」に参加した青年は座談会でソ連に行って学んだことについて次のように述べている。「若者が主体となってやらなければならない—というソビエトの各地で得た実感これから生かしていきたいと考えています。」⁵⁵

第2回「訪ソ青年の船」に参加した別の青年は、座談会でソ連に行って学んだことを伝えていくという意気込みについて次のように語っている。「まず見てきたことすべてを報告しなければならないと思っています。このほか、ソ連訪問の経験ある先輩や町長さんなどがおられますのでその人たちを囲んで、前に行かれた時のソ連と今の現在の私の見たソ連ということを話し合いそれを町民の人たちに伝えながらまた活動を進めていきたいと考えています。」⁵⁶

小畑は、第2回「訪ソ青年の船」の座談会で「訪ソ青年の船」の役割について次のように語っている。「私たちの行動はテレビでもラジオでもみな放送され、市民が知っている。ですからこの「青年の船」の成果は単に秋田県にとってだけではなく、日ソの親善友好に非常に大きな役割を果たしていると思います。また七つの都市を訪問したが、全ソ連に秋田というものを非常に強く印象づけた。」⁵⁷

ソ連の人々との交流に関しては、英語が話せないためにコミュニケーションを取ることが難しかったという声があった。このようなエピソードがきっかけとなって青年たちは英語に力を入れたいという意識を持つ

ようになったことだろう。海外経験が良い刺激になり、学習に対する意識が高まったはずである。

ソ連に実際に行った青年たちは、地元の人々に経験を伝えたいと述べていたことから、「訪ソ青年の船」の経験によって海外に目を向ける必要性をソ連に行った青年だけでなく、話を聞いた県民にも伝えることができただろう。

また、若者が主体となってやらなければならないと述べていた青年もいたことから、小畑の5期目のスローガンにある「若い力を県政に」を実現するきっかけとなった事業の一つだと考える。

「訪ソ青年の船」は、8年間しか続かなかったが、ここに1つの問題があると考えられる。青年たちが貴重な国際経験を積むことができる事業をなぜ止めてしまったのだろうか、生涯教育の観点から疑問である。

③日中友好秋田県農業青年の翼

1976年から「日中友好秋田県農業青年の翼」が始まり、小畑が団長を務めた⁵⁸。1976年には135人の青年と一緒に18日間にわたり、農業研修を行ったが、そこでは農業の基本である、「自然循環、自給自足の原則」に対して、小畑は感銘を受けたと述べている⁵⁹。「日中友好秋田県農業青年の翼」が始まった頃は、日中の往来が閉鎖的だったが、田中角栄内閣総理大臣の努力による国交正常化に伴い、各団体が中国に訪問するようになった時期であった⁶⁰。

「日中友好秋田県農業青年の翼」の目的は、「訪問先農業青年との交歓、現地の文化産業（農業）、経済等の視察により国際的視野を広め日中友好の増進をはかるとともに、規律ある団体生活と研修を通じて、連帯意識の高揚をはかり、将来の中核的農業経営者を育成すること」⁶¹であった。例えば、1977年には、北京、南京、上海などを回り、中国農業を学んだ⁶²。

1970年代から中国と交流を深めて農業について学んでいたことが、秋

田口 アキ

田県の農業に活力を与えた理由の一つだったのではないだろうか。海外での経験が良い刺激となり、仕事に対する意識が高まるきっかけとなっただろう。青年や小畑の考えからわかるように、中国の農業を見学したことが日本の農業を見直す機会となったはずである。

5. 考察

(1) 秋田県における生涯教育推進の特色

小畑が県知事を務めた1970年代の秋田県における生涯教育推進のための具体的な取り組みの特色として、ネットワーク行政、多様な教育機会を統合する概念としての生涯教育、コーディネーターの配置、生きがいの重視ならびに国際化を挙げることができる。

秋田県の1970年代の生涯教育政策と事業の歴史の流れを年表でまとめたもの（図1）をもとに、以下にそれぞれの特色について述べる。

① ネットワーク行政による生涯教育推進

日本は、1960年代から70年代にわたる高度経済成長によって、社会状況が急激に変化したことや、人々の間のコミュニケーションが希薄になったという時代状況にあった⁶³。また、当時の秋田県の各年代の教育状況は、幼稚園数・園児数及び就園率が全国平均よりも低かったこと⁶⁴や、地域別の高等学校進学率は秋田県中心部と周辺部の間に大きな差があること⁶⁵など、それぞれの年代や地域事情で教育課題が多かった。このような教育課題を解決することが、生涯教育推進の背景にあったとみられる。

秋田県は、小畑の主唱により、1970年に11課16名による生涯教育のためのプロジェクトチームを設置した。また、秋田県は、様々な課が連携し、ネットワーク行政によって多角的な視点から物事を検討しながら生涯教育を推進していったことが、秋田県の生涯教育の特徴の一つであ

ると考える。

同年に出された、『第3次秋田県総合開発計画』では、三つの課題の一つに「生涯教育の推進と人間能力の開発」が掲げられていたことから、秋田県全体として生涯教育の推進に力を入れようとしていたことがわかる。

1972年には、秋田県生涯教育推進本部が設置され、小畑が本部長を務め、副知事と教育長が副本部長を務める体制を整えた。

1976年には、『第4次秋田県総合開発計画』が出され、主要課題の一つに「豊かな未来社会を築く主体性のある人間形成 —豊かな心—」が掲げられ、この課題を実現するためには、生涯にわたって学び続けることができるような環境を整えることが必要だと述べられていた。このことから、秋田県は、心を豊かにするための生涯教育を提供していこうとしていたといえるのではないだろうか。

②多様な教育機会の統合

秋田県では、様々な生涯教育事業や施設建設を展開していった。その際、「生涯教育」とは幼児期から高齢期までの人生のすべてに関わる学びだけでなく、学校教育、社会教育、家庭教育、子育て支援などの多様な教育機会を連携、統合するという幅広い概念として導入していた。

秋田県は、生涯教育を推進する以前から、「巡回文庫」や「農業近代化ゼミナール」、「商工ゼミナール」といった社会教育に力を入れており、このような取り組みが生涯教育を推進する上で基礎となっていたと考えられる。

このように、「生涯教育」の概念が導入されるより前から社会教育の基盤が構築されていた秋田県で、1970年以降に新設された秋田県生涯教育センターや秋田県立博物館を拠点に、誰でも生涯にわたって学ぶことができるように、学校教育、社会教育、家庭教育ならびに子育て支援が、それぞれ連携を意識しながら展開されていった。

田口 アキ

これらの生涯教育事業の拠点として、秋田県生涯教育センターが1980年に開所され、「秋田県コミュニティ・カレッジ」が開設された。「秋田県コミュニティ・カレッジ」は、県民のニーズに合った幅広い分野の講座が開講され、コースや講座を選択できること、大学の教官や学識経験者が講師として講座を開設し、地域の人材が活用されていた⁶⁶。

また秋田県では、映像を通じた学習と2ヶ月に1度、直接先生に会って学習する「放送県民大学」にも取り組んでいた⁶⁷。

同じく、生涯教育事業の拠点であり、学校教育と連携している施設として、秋田県立博物館が挙げられる。秋田県の事例をもとに学習するカリキュラムがあったこと⁶⁸や、博物館と学校が連携した授業⁶⁹が行われていた。地元を題材とした理科や社会の授業に関する事例をもとに学習することで、秋田県に関する知識を身につけたり、郷土の良さを知ったりできると同時に、学習内容をより身近に感じ、興味、関心を持つきっかけになると考える。子どもたちには郷土愛が生まれ、育まれるだろう。

幼児教育の分野においては、例えば幼児教育の分野で親のための教育として、西ドイツの「ペリカン通信」をモデルにし、親に対して子育ての知識を書いたはがきを送る「スギの子通信」が行われていた⁷⁰。また、県内の各市町村を指導者が回って家庭教育での相談に乗り、子育てに関する知識を提供する「移動スギの子ひろば」や、育児に関する指導を専門家がわかりやすく行う内容のテレビ番組「スギの子ひろば」も推進していた⁷¹。このことから、秋田県では家庭教育にも力を入れていたことがわかる。

③多様な生涯教育を県民に実現させるためのコーディネーターの配置

生涯教育事業のコーディネーターとして、「生涯教育奨励員」や「生涯教育奨励室」（通称「ブルーの窓口」）を設置した。「生涯教育奨励員」は、市町村に設置したが、県主体ではなく、県から市町村に生涯教育の主導権が移り、生涯教育が県全体に根付くように力を入れていたとみること

ができる。県民にとっても、市町村単位で「生涯教育奨励員」がいることで、生涯教育がより一層身近になったのではないだろうか。このほかにも「生涯教育奨励室」（通称「ブルーの窓口」）を設置したが、学習の相談窓口があることで、県民が気軽に学習相談ができるようになった。

④生きがいを重視した生涯教育推進

秋田県では「生きがい」を求めた学習事業として、「高齢者学級」を挙げることができる。老後の長い人生を楽しく生き生きと過ごすことを可能とするために「高齢者学級」がつくられたのだろう。このほかにも、実施のねらいに「生きがい」という言葉を当てていた「市民大学講座」が挙げられる⁷²。また、「企業内教育」においては、社会状況の急速な変化への対応のための学習だけでなく、自己実現のための学習を通した「生きがい」のある職場づくりなどが、生涯教育から見た「企業内教育」の必要性であった⁷³。

⑤秋田県の国際化

秋田県の生涯教育の分野で国際的な事業として「訪ソ青年の船」や「日中友好秋田県農業青年の翼」が挙げられる。小畑が自ら団長を務め、青年とともにソ連や中国に渡り、国際交流を行った。海外に目を向ける姿勢を身につけることや、今後の秋田県の発展に生かすために、改めて自分のふるさとを見つめ直すことなどが事業の目的となっていたことがわかった。また、教育や農業などについても学び、数多くの国際経験を重ねた。このような事業を行うことで、秋田県の良さに気づくことができ、郷土愛が強くなったことだろう。しかし、この事業は、現在は取り組まれていないため、事業をうまく引き継がれなかったところに問題がある。

このほか、アメリカの「コミュニティ・カレッジ」の影響を受けた「秋田県コミュニティ・カレッジ」や、フランスの「アニマトゥール」を参考にした「生涯教育奨励員」、西ドイツの「ペリカン通信」をモデルとし

田口 アキ

た「スギの子通信」といったように、海外の当時の先進的な生涯教育の取り組みも積極的に取り入れていたことは、秋田県の国際性の表れとみなすことができるだろう。

田口 アキ

(2) 今後の生涯学習のあるべき姿

2018(平成30)年度の内閣府の生涯学習に関する世論調査で、全国の18歳以上の日本国籍を有する1710人⁷⁴から回答を得た中で、「学習したことがある」と答えた999人⁷⁵に対して、「学習した理由」を聞いた。その結果、「人生を豊かにするため」と答えた人が36.2%⁷⁶であったことから、人生を豊かにするために生涯学習をしている人の割合が比較的多いことがわかる。このことから、現代は「人生を豊かにする学習」を推進していくべきだと考える。しかし、生涯学習をするための学習経費の問題が、学習活動への参加に大きな影響を与えており、経費支援の在り方が生涯学習振興の課題⁷⁷といわれている。つまり、自分の人生を豊かにするためには「決して軽いとはいえない受益者負担」を強いられているのが現状である。

持続可能な開発目標(SDGs)の4つ目には、全ての人々に質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進することが掲げられている⁷⁸。また、「人生100年時代」と言われている現代は、「より多様で豊かな生き方・暮らし方のマルチステージの生き方」⁷⁹が求められている。

2018年の中央教育審議会の答申で、これからの新たな社会教育の方向性としては、「開かれ、つながる社会教育の実現」を挙げている⁸⁰。そのために、多くの住民が主体的に参加できるような方策を工夫し強化する「住民の主体的な参加のためのきっかけづくり」、首長や大学、企業などと連携する「ネットワーク型行政の実現化」、地域の学びと活動を促進するための多様な人材の活躍を援助する「地域の学びと活動を活性化させる人材の活躍」に取り組むこととしている⁸¹。

そこで、小畑が力を入れていたように、地域の人材をうまく活用し、人と人とのつながりや大学、首長との連携を大切にしながら学習する方式、体制を取り入れることによって、学習するため(「人生を豊かにする」学習をするため)の受益者負担を軽減し、これからの新たな社会教育の方向性である「開かれ、つながる社会教育」を実現することができるの

ではないだろうか。また、「人生を豊かにするため」に生涯学習をしている人が多いことや、「人生100年時代」といわれていることから見ても、小畑が重んじていた「生きがいを感じる」と「楽しく過ごすための生涯学習」にますます力点を置くべきだと考える。

秋田県が生涯教育の推進からちょうど半世紀が経った現在、本論文で見てきたように、小畑が中心となって推進してきた「生きがいを感じる学習」、そして、「人と人とのつながり」を大切に、「地元の人材をうまく活用する」ことに力を注いできた秋田県の生涯教育の原点を、今こそ再認識すべきである。

注

- ¹ 秋田県教育委員会（編）1986『秋田県教育史 第6巻 通史編2』, 秋田県教育史頒布会, pp.1253-1264
- ² 小畑勇二郎顕彰会（編）1985『小畑勇二郎の生涯』, 小畑勇二郎顕彰会
小畑勇二郎顕彰会（編）2001『大いなる秋田を —『小畑勇二郎の生涯』補遺選一』, 小畑勇二郎顕彰会
- ³ 岡本包治 山本恒夫 1985『生涯教育対策実践シリーズ〈2〉都道府県の生涯教育システム』, ぎょうせい, pp.56-57
- ⁴ 井上講四 2007「生涯教育（学習）政策・研究の今日的状況とその諸相 —その新たなる基軸と枠組みを求めて—」『琉球大学生涯学習教育センター研究紀要』第1巻, pp.1-28.
<http://ir.lib.uryuky.ac.jp/bitstream/20.500.12000/6607/1/Vol1p001.pdf>
2019年10月25日参照
- ⁵ 山田正行 2003「生涯学習と大学の地域貢献 —自己教育の視点から—」『秋田大学教養基礎 教育研究年報』第5巻, pp.19-30.
https://air.repo.nii.ac.jp/index.php?action=repository_action_common_download&item_id=445&item_no=1&attribute_id=48&file_no=1&page_id=13&block_id=21 2019年10月25日参照
- ⁶ 古内一樹 原義彦 2015「秋田県における生涯教育推進の展開過程と生涯学習センターの役割」『秋田大学文化教育学部教育実践研究紀要』第37号, pp.173-180.
https://air.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=2598&item_no=1&attribute_id=48&file_no=1 2019

田口 アキ

年10月25日参照

- ⁷ 小畑勇二郎顕彰会(編)1985『小畑勇二郎の生涯』, 小畑勇二郎顕彰会, p.818
- ⁸ 同上, p.23
- ⁹ 田代小畑勇二郎顕彰会(編)2004『小畑勇二郎小伝 今やらねば信・実のひと』, 田代小畑勇二郎顕彰会, pp.33-34
- ¹⁰ 小畑勇二郎1970『七十年代の教育を考える 一生涯教育体系の確立を―』, 秋田県教育庁生涯教育研究班, p.7
- ¹¹ 秋田県生涯教育推進本部(編)1985『秋田の生涯教育 一回顧とこれからへの期待―』, 秋田県生涯教育推進本部, p.9
- ¹² 小畑勇二郎1978『秋田の生涯教育 果てしも見えぬ花野かな』, 全日本社会教育連合会, p.52
- ¹³ 前掲, 『秋田の生涯教育 一回顧とこれからへの期待―』, p.16
- ¹⁴ 小畑勇二郎 前掲, p.233
- ¹⁵ 同上
- ¹⁶ 秋田県(編)1971『第3次秋田県総合開発計画』, 秋田県, p.7
- ¹⁷ 同上
- ¹⁸ 秋田県広報協会(編)1983「生涯教育 これまでのあゆみ」『あきた』第253号, p.9.
http://common3.pref.akita.lg.jp/koholib/search/html/253/pdf/253_009.pdf
2020年11月15日参照
- ¹⁹ 前掲, 『第3次秋田県総合開発計画』, p.79
- ²⁰ 同上
- ²¹ 秋田県広報協会(編)1971「日本海時代をひらく」『あきた』第111号, p.20.
http://common3.pref.akita.lg.jp/koholib/search/html/111/pdf/111_020.pdf
2020年11月17日参照
- ²² 前掲, 『第3次秋田県総合開発計画』, p.79
- ²³ 同上, pp.79-80
- ²⁴ 前掲, 『第4次秋田県総合開発計画』, p.23
- ²⁵ 同上
- ²⁶ 同上, p.24
- ²⁷ 同上
- ²⁸ 同上, p.27
- ²⁹ 同上
- ³⁰ 同上
- ³¹ 前掲, 『秋田の生涯教育 一回顧とこれからへの期待―』, p.17
- ³² 秋田県生涯教育推進本部(編)1973『生涯教育の構想とその実践』, 秋田県生涯教育推進本部, p.38

- ³³ 秋田県生涯教育推進本部 1974「生涯教育奨励員の手引き」『秋田の生涯教育 —10年の足跡—』, 秋田県生涯教育推進本部, p.28
- ³⁴ 同上, p.29
- ³⁵ 同上
- ³⁶ 同上, p.30
- ³⁷ 同上
- ³⁸ 同上
- ³⁹ 前掲, 『生涯教育の構想とその実践』, p.28
- ⁴⁰ 著者不明 1977「生涯教育奨励室生涯教育奨励員設置運営要領」『秋田の生涯教育 —10年の足跡—』, 秋田県生涯教育推進本部, p.1
- ⁴¹ 前掲, 「生涯教育奨励員の手引き」『秋田の生涯教育 —10年の足跡—』, p.33
- ⁴² 小畑勇二郎 前掲, p.170
- ⁴³ 前掲, 「生涯教育奨励室生涯教育奨励員設置運営要領」『秋田の生涯教育 —10年の足跡—』, p.1
- ⁴⁴ 前掲, 「生涯教育奨励員の手引き」『秋田の生涯教育 —10年の足跡—』, p.34
- ⁴⁵ 小畑勇二郎顕彰会(編)2001『大いなる秋田を —『小畑勇二郎の生涯』補遺選—』, 小畑勇二郎顕彰会, p.95
- ⁴⁶ 前掲, 『小畑勇二郎の生涯』, p.497
- ⁴⁷ 前掲, 『大いなる秋田を —『小畑勇二郎の生涯』補遺選—』, p.95
- ⁴⁸ 小畑勇二郎 前掲, p.136
- ⁴⁹ 前掲, 『小畑勇二郎の生涯』, p.497
- ⁵⁰ 秋田県広報協会(編)1973「訪ソ“青年の船”洋上座談会」『あきた』第137号, p.2.
http://common3.pref.akita.lg.jp/koholib/search/html/137/pdf/137_002.pdf
2020年12月9日参照
- ⁵¹ 前掲, 『小畑勇二郎の生涯』, p.351
- ⁵² 秋田県広報協会(編)1972「青年海外研修行動記録」『あきた』第125号, p.14.
http://common3.pref.akita.lg.jp/koholib/search/html/125/pdf/125_014.pdf
2020年12月9日参照
- ⁵³ 同上
- ⁵⁴ 秋田県広報協会(編)1973「訪ソ“青年の船”洋上座談会」『あきた』第137号, p.3.
http://common3.pref.akita.lg.jp/koholib/search/html/137/pdf/137_003.pdf
2020年12月9日参照
- ⁵⁵ 秋田県広報協会(編)1972「訪ソ“青年の船”座談会」『あきた』第125号, p.7.
http://common3.pref.akita.lg.jp/koholib/search/html/125/pdf/125_007.pdf
2020年12月9日参照
- ⁵⁶ 秋田県広報協会(編)1973「訪ソ“青年の船”洋上座談会」『あきた』第137号,

田口 アキ

- p.5.
http://common3.pref.akita.lg.jp/koholib/search/html/137/pdf/137_005.pdf
2020年12月9日参照
- ⁵⁷ 同上, p.6.
http://common3.pref.akita.lg.jp/koholib/search/html/137/pdf/137_006.pdf
2020年12月9日参照
- ⁵⁸ 前掲, 『小畑勇二郎の生涯』, pp.497-498
- ⁵⁹ 小畑勇二郎 前掲, p.127
- ⁶⁰ 前掲, 『小畑勇二郎の生涯』, p.497
- ⁶¹ 小畑勇二郎 前掲, p.140
- ⁶² 秋田県広報協会(編)1977「大陸に広がる友情の輪」『あきた』第184号, p.5.
http://common3.pref.akita.lg.jp/koholib/search/html/184/pdf/184_005.pdf
2020年12月10日参照
- ⁶³ 前掲, 『第4次秋田県総合開発計画』, p.7
- ⁶⁴ 同上, p.179
- ⁶⁵ 同上, p.183
- ⁶⁶ 秋田県生涯教育センター(編)1980『生涯教育センターの運営計画 昭和55年度』, 秋田県生涯教育センター, p.28
- ⁶⁷ 小畑勇二郎 前掲, pp.144-145
- ⁶⁸ 秋田県立博物館(編)1978『生徒と先生のための博物館学習』, 秋田県立学術館, pp.11-13
- ⁶⁹ 小畑勇二郎 前掲, p.103
- ⁷⁰ 同上, p.120
- ⁷¹ 同上, pp.119-121
- ⁷² 秋田県教育委員会(編)1977『あきたの市民大学講座 一生きがいを求めて学び合うひとびと一』, 秋田県教育委員会, p.1
- ⁷³ 秋田県生涯教育推進協議会(編)1974「第1課題 生涯教育の観点から企業内教育をどのように進めたらよいか」『秋田の生涯教育 一10年の足跡一』, 秋田県生涯教育推進本部, pp.1-2
- ⁷⁴ 内閣府2018「調査の概要」,
<https://survey.gov-online.go.jp/h30/h30-gakushu/1.html> 2020年7月25日参照
- ⁷⁵ 内閣府2018「1.生涯学習の状況などについて」,
<https://survey.gov-online.go.jp/h30/h30-gakushu/2-1.html> 2020年7月25日参照
- ⁷⁶ 内閣府2018「図2 学習をした理由」,

<https://survey.gov-online.go.jp/h30/h30-gakushu/zh/z02.html> 2020年10月10日参照

⁷⁷ 今西幸蔵 2015 「学習活動における財政的支援に関する提言」『日本生涯教育学会年報』第36号, pp.111-119.

<http://www.j-lifelong.org/wp-content/uploads/2015/06/36-7-1.pdf> 2019年10月25日参照

⁷⁸ 中央教育審議会 2020 『第10期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理 多様な主体の協働とICTの活用で、つながる生涯学習・社会教育～命を守り、誰一人として取り残さない社会の実現へ～』, p.2.

https://www.mext.go.jp/content/20201013-mxt_syogai02-10074_01.pdf 2021年1月10日参照

⁷⁹ 同上, p.6

⁸⁰ 中央教育審議会 2018 「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について（答申）概要」, p.1.

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/12/21/1412080_2_2.pdf 2021年1月10日参照

⁸¹ 同上